Ania Loomba: *Shakespeare, Race, and Colonialism*

Oxford: Oxford UP, 2002. xii＋192 pp.

八鳥吉明

Ania Loomba は，イギリス・ルネサンスにおけるポストコロニアル研究において，中心的な役割を果たしてきたインド出身の英文学者である。

ポストコロニアル研究は Loomba も述べているように「比較的新しい分野」（*Colonialism/Postcolonialism* xi）である。1980 年代の新歴史主義を経て 1980 年代後半になると，Shakespeare のテクスト表象の諸問題を，歴史的文脈を視野に収めつつ，ジェンダーやセクシュアリティーや階級の視座から批判的に検証するフェミニスト批評やクイアー批評や文化唯物論が登場する。「人種」を考察の対象とするポストコロニアル研究もこうした批判理論の系譜に属する。そこには近代性に対する批判がある。実際 Loomba は本書において初期近代を初期植民地化と捉えている。つまり植民地化の過程が「助産婦」(16) の役割を果たし，ヨーロッパ諸国の成立と近代性の発生を可能にした。ヨーロッパのアイデンティティーも植民地化の過程における内外の他者との遭遇の中で形成されていったのである。「人種」はその産物である。

Loomba は 1998 年の前著 *Colonialism/Postcolonialism* において，ポストコロニアル研究を現代の批評理論の中に位置付ける理論的作業を行なった。しかも同年に *Post-Colonial Shakespeares* の編者として，Shakespeare とポストコロニアル研究の緊張と可能性に満ちた「対話」(2) の実践を試みている。本書はこうした理論的・実践的作業の延長にある。

まず序論では「人種」と「植民地主義」という二つの主題が Shakespeare 研究において焦点となる理由が論じられている。Loomba にとって「人種」とは

“race” という 1 語を指すのではない。「人種」とは他者性に纏わる一つの言説範疇である。つまり「人種」とは社会階層の強化・創出のために展開されてきた範疇であり，社会的に構築された分類である。しかもそれは現実的な影響を及ぼし続けてきた。そうした中にあって Shakespeare の劇は「人種」と「植民地主義」に関する概念の歴史的・文化的媒体であった。歴史的・地理的・社会的に多層な「人種」の概念や言語と Shakespeare の関係が問題となる所以である。

また近代的な意味における「国家」“nation” の概念がイングランドで形成されたのもこの時代である。内政・外交における不安が，同質性や，自己と他者を峻別する境界線を指向する国家のアイデンティティー形成と植民地化を駆動し，人種範疇の硬化と近代的人種差別をもたらした。しかし同質性・境界線はつねにすでに冒され，侵されている。Shakespeare の他者表象はまさにその矛盾と関係していることが指摘される。

第 1 章は “race” という語が Shakespeare のテクストや初期近代という時代の中で「屈折」(22) していった状況を考察している。同時に，特定の語に限定されない「人種」の差異概念の形態やイデオロギーが検証される。初期近代において，“race” は家系・血統，民族共同体・国家，宗教，階級を意味し，さらにジェンダーやセクシュアリティーとの概念的関連性を有した。自己と他者の差異の確立が求められた歴史的文脈でこの重層的な定義が相互に関係付けられた結果，“race” の概念は文化的のみならず生物学的にコード化されるようになり，身体の差異化とそれに対応する内面の道徳的差異化がもたらされた。その典型が肌の色，特に黒い肌の人種化である。章の最後に「人種」と「植民地主義」の関係が扱われるが，異文化との接触が多様な形態をとり，また Shakespeare 劇においても見られるように「人種」も多様な差異を内包するため，その関係は複雑なものになることが述べられる。

第 2 章は宗教と肌の色に関する信念の交差がいかに人種概念の展開に与ったかを考察している。特にイスラム教と黒い肌の関係が議論の焦点となる。古典や中世のテクストを通じて，黒い肌は過剰な性的欲望や悪を連想させるものとなるが，この連想の伝統は初期近代にイスラムとの関係で再活性化された。この連想は外観と内面の一致を前提とするが，改宗という概念は外観と内面のず

れをもたらす。改宗がアイデンティティーと共同体の問題となるのはこの文脈においてである。初期近代，肌の黒さを拭い去ることの不可能性と改宗の不可能性はしばしば連動して表現された。さらにスペインの異端審問で導入された純血の法は，信仰を血という内的本質と結びつけることで擬似生物学化した。信仰はもはや選択の問題ではなくなる。Loomba はこうして宗教と肌の色が人種概念の歴史的展開において核となる問題であったことを跡付けるのである。

第 3 章からは作品論が展開される。*Titus Andronicus* を扱うこの章では，「黒」の観念が逸脱した女性性と交差する状況が考察される。まず Aaron は肌の黒いムーア人奴隷として登場するが，奴隷貿易を伴う初期植民地化の世界で，黒い肌の道徳的堕落という古いステレオタイプは新しい階級的・文化的・地政学的意味合いを帯びていく。さらに Aaron と Tamora の密通というスキャンダルは反目するローマとゴートの差異を消滅させ，ムーア人と野心的女性を差異化・他者化するが，それは植民地化に伴いヨーロッパで新たな国家的アイデンティティーが形成され，ヨーロッパを他者から区別するための再編成が必要とされていた歴史的文脈と連動している。また女性の性欲に纏わるステレオタイプと「アマゾン」のステレオタイプが織り合わされることで，Tamora は社会的編入に抵抗する逸脱的女性性の体現者となるが，その恐怖が Aaron との関係を通じて示されるのである。このように Aaron が喚起する「黒」の邪悪性・セクシュアリティーに関する古いステレオタイプは，「人種」・国家・女性性についての新しい不安を媒介していることが分析される。

Othello を扱う第 4 章では，宗教の次元が前章の問題系を複雑化する状況が考察される。つまりキリスト教徒のムーア人を主人公とする *Othello* では，肌の色と宗教に関わる諸観念が人種イデオロギーの内部で矛盾を孕みながら結合され，しかもそれらが性差の概念によって動態化されるのである。まず Othello の「嫉妬」は，武勇と理性に優れたキリスト教徒としての彼のアイデンティティーを中断させ，彼を嫉妬深いムーア人・トルコ人というステレオタイプの体現者にしてしまう。その際，人種的差異を強化する男の嫉妬と暴力は女の不貞というステレオタイプに誘発されるのである。さらにイスラム嫌悪のカトリック国スペインに対抗するイングランドのイスラムへの矛盾する態度を背景に，この

劇はイスラムとの宗教的差異の問題に反応しているが，その差異は黒い肌が喚起する不安（異種族混交）によって複雑化される構造になっている。このように *Othello* はムーア人に関する様々な言説を融合・媒介し，「人種」が均質の範疇ではないことを再認識させるのである。

第5章では *Antony and Cleopatra* が取り上げられ，人種イデオロギーが様々な時代の文学，歴史書や大衆文化等の諸概念を融合させながら，過去と現在を結ぶ多層的なものであることが論じられている。つまり Cleopatra を中心に据えることで，この劇は帝国とセクシュアリティーをめぐる既存の物語の伝統に，女性権力・外国人・帝国に対する初期近代イングランドの不安を織り込んでいくのである。具体的にはローマとエジプトという古い2項対立が劇を動かし，そこに初期近代イングランドの諸問題が配置される。例えばエジプトにみられる異性装等のジェンダーの反転は，イングランドに起こっていたジェンダー論争への言及となる。さらに帝国の征服と外国女性の征服・改宗を同義とするステレオタイプを裏切る黒い肌の Cleopatra とエジプト人化する Antony は，海外市場への欲望とキリスト教徒のイスラム化の恐怖とを参照項としている。この不安はエジプト人とジプシーの混同によっても媒介される。ジプシーはイングランドを汚染・改宗する異端の詐欺師と考えられていた。以上のように「人種」の概念が，同時代のイングランドが抱えていた不安を反映させながら，様々な時代から選び取られた語彙を通じて「分節化」(20) され，新たな意味の層を獲得していった状況を第5章は分析している。

最後の第6章が扱うのは *The Merchant of Venice* である。この劇は Shakespeare 劇中，「人種」と経済の関係が追究される唯一の劇であり，ユダヤ人の問題が焦点となる唯一の劇である。ここではユダヤ人問題，資本主義と植民地主義，そしてセクシュアリティーの問題が考察されていく。まず Shylock を構成する歴史的文脈が検討される。ユダヤ教徒はイスラム教徒や黒人と結び付けられ，キリスト教徒と差異化されたが，ユダヤ教徒の改宗による差異の消失という不安が，逆にユダヤ教徒の人種化をもたらしたのである。経済に関しても同様の議論が展開される。社会的差異を抹消するはずの貨幣経済は，この劇では宗教的差異を悪化させ，キリスト教徒とユダヤ教徒の経済的対立を人種化する。

この社会的不均衡が資本主義や植民地主義の基盤となるのである。セクシュアリティーの問題としては，Jessica のキリスト教徒との結婚・改宗が挙げられる。この展開は異教徒の改宗による富と宗教の交換というステレオタイプを踏襲しているが，ユダヤ性の痕跡をとどめてもいる。それは経済取引がもたらす改宗による異種族混交の不安を反映している。このように宗教・経済・セクシュアリティーは人種化と不可分であることが分析されるのである。

結論では *The Tempest* を例に取り，Shakespeare における「人種」と「植民地主義」の研究が考察の対象とすべき範囲が再確認される。Shakespeare 研究において *The Tempest* は「人種」と「植民地主義」の問題と特に密接に関わる劇とされ，しかもその際，新世界アメリカが劇の起源を理解するための特権的文脈と考えられる傾向にあった。その結果 Prospero と Caliban の関係はヨーロッパとその他者の関係を象徴するものとみなされた。Loomba は，Prospero と Caliban の関係は他の関係——ヨーロッパのキリスト教徒とトルコ人，アフリカ人，ユダヤ教徒等の関係——も背景としており，また劇の文脈も大西洋だけではなく地中海，北アフリカ，アイルランド等にまで及ぶと指摘する。このように植民地化がもたらした多様な地域の広域的な関係を Shakespeare の劇に読み込むことで，「植民地主義」と「人種」の問題を解明することを Loomba は提唱するのである。

本書の構成は，前半（第 1 章と第 2 章）で初期近代の「人種」に関する一般的な歴史的枠組を示し，後半（第 3 章から第 6 章）でその枠組を個別の劇に応用するというものである。前半で提示される広範な歴史的文脈が本書を極めて有益なものにしているのは間違いない。しかしその応用には問題がある。応用という性質上，劇の解釈は歴史とテクストとの照応と逸脱の関係に焦点を置き，Eric S. Mallin の言葉を借用すれば，「解釈学的複雑性を減じ」(353) てしまっている。その問題を一つ具体的に指摘するならば，本書においては劇中人物のアイデンティティーは専ら人種的ステレオタイプの観点から分析と意義付けが行なわれる傾向が強いが，それは作品解釈の平板化を招きかねない。

「人種」はさらに他の主題と関連させることでよりダイナミックな様相を示すはずである。例えば「主体」の概念の導入は，アイデンティティーに関する

議論をより緻密なものとするはずである。また劇では "rape"(*Titus Andronicus*)や "homosocial" (*Othello* や *The Merchant of Venice*) や "body" (*Antony and Cleopatra*) 等の主題が「人種」の問題と交錯している。その一層の追究は劇と「人種」の意味をより精緻なものとするだろう。

しかし Loomba の根本方針の重要性は揺るがない。Loomba が主張するように，シェイクスピアにおける「人種」の分析は，初期近代イングランドの国家，宗教，階級，さらにジェンダーやセクシュアリティーといった問題系列との関連においてだけではなく，「植民地主義」がもたらしたグローバルな世界情勢との関連においてもなされるべきなのである。

引用文献

Loomba, Ania. *Colonialism/Postcolonialism*. London: Routledge, 1998.

Loomba, Ania, and Martin Orkin, eds. *Post-Colonial Shakespeares*. London: Routledge, 1998.

Mallin, Eric S. Rev. of *Shakespeare, Race, and Colonialism*, by Ania Loomba. *Shakespeare Quarterly* 55 (2004): 352–55.